

あいちの産業史

I. 江戸時代に至るまで(～16世紀)

愛知県は日本列島のほぼ中央に位置し、気候は年間を通して温暖です。河川に恵まれているほか、濃尾と三河の平野部は広く、太古より人々が生活を営んできた地域です。

縄文時代は狩猟・採集生活が主とされています。この時代名の由来である縄文土器は、日本における窯業黎明期の産物といえます。

稲作のはじまった弥生時代になると、大陸よりさまざまな技術が伝わり、絹や麻を素材にした織物の生産や、刀剣類・農具などに用いる鉄器が全国各地で製作されるようになりました。

各地に多くの古墳が築かれはじめた4世紀には、近畿地方にヤマト政権が成立。地理的に近い当地域は早くから協力関係を結んだとみられます。愛知県は全域に古墳が残り、有力豪族が相当数存在していたと推定されます。

645年(大化元年)にはじまった大化の改新により、天皇を中心とした中央集権国家が建設されていきました。国・郡・里制による地方分権が確立し、「租・庸・調」の税制も統一されます。

このころから、当地域は尾張と三河のふたつの国となりました。ふたつの国に分かれる地理的・政治的な背景があったのだと想像されますが、尾張と三河

の区分は今日まで綿々と続いています。

税は主として食用米と衣服用の布で、さらに労役および地域産物が課されました。全国各地の産品が各種記録に現れるのはこの時期からです。衣服素材として絹織物は高級品とみなされ、庶民は麻類の布を使っていたようです。

800年(延暦18年)7月、三河国幡豆郡に漂着した天竺船により綿の種がもたらされ、綿花の栽培と綿織物の技術が伝わったという記録が残っています。しかしこれは根付くことなく、各地で綿花栽培から綿織物の生産が本格化するのには室町時代以降という説が有力です。

鎌倉時代に入るところには、農業生産力が向上し、貨幣経済も進展しました。そのなかで武士が勢力を拡大し、鎌倉幕府の誕生、そして室町幕府へと武家政権が続くことになります。

室町時代の代表的な輸出品として刀剣類があり金属加工の技術進歩がうかがえます。しかし当地域は鉱産物に恵まれず、金属分野で目立った動きはみられなかったようです。反面、瀬戸や常滑では陶器生産が盛んになります。良質の陶土に恵まれたほか、燃料となる木材が豊富だったこともその要因とされています。そのほかにも外国との交易関連で、中国に渡った僧侶が持ち帰った技術として「接木」があり、稲沢の植木生産の起源とされています。

続く安土・桃山時代には、戦国大名が群雄割拠するなかで、当地域で生まれ育った織田信長と豊臣秀吉により天下統一が成し遂げられます。この時代の天下統一は、兵力や兵法だけでなく、資本蓄積を進めていた商人による経済的な後ろ盾が重みをもつようになっていました。西洋は大航海時代に入っており、わが国へはキリスト教や鉄砲が伝来しました。楽市楽座という商工業者保護政策で有名な信長です



石製品(岡崎市立中央図書館蔵)



有松絞り店(白黒の尾張名所図会をイメージ着色) 画像提供: Network 2010

が、肥沃な濃尾平野を領地としていたことや、尾張の経済力とその勢力を後押ししたと考えられます。津島や熱田では、陸路・水運の利から商業が栄え、多数の専属兵力を養うための軍資金調達が比較的容易だったと想像されます。

II. 江戸時代(17～19世紀)

1600年(慶長5年)の関ヶ原の戦いを経て、徳川家康が江戸に幕府を開きました。

16世紀末～17世紀前半は朱印船貿易が行われ、わが国からは銀、銅、刀剣などが輸出される一方、生糸、絹織物、綿織物、砂糖などが輸入されていました。ところが3代目将軍家光は、海外渡航禁止と外船来航禁止(鎖国)を実施。以降、この時代は交易を通じた外国製品や技術の伝来が乏しくなりました。そのころ諸藩は、藩財政の改善に向けて各種産業の奨励策を打ち出していました。これが全国各地に

地場産業が興る大きなきっかけとなりました。また木版印刷技術の普及にともない教育機会が広がったことも、わが国産業技術の進歩を後押しすることになります。

尾張藩は親藩最高位の御三家と位置付けられました。家康の命にしたがい、名古屋城は1610年(慶長15年)から4年の歳月をかけて築られました。このときに熱田港から掘削した全長6,200メートルの運河が堀川です。一方、三河は多くの譜代大名や旗本の領地として分けられました。この体制は明治の廃藩置県まで続きます。

名古屋城が完成すると、清州から武士や町民、神社や寺までが名古屋へ移住(清州越え)しはじめました。さらに全国各地から城や町の整備に関わる職人なども集まり、城下町が形成されることとなります。名古屋が大都市・消費都市として発展を遂げるにつれて高級衣服、身の回り品や贈答品などの産業が興

隆し、根づきました。代表的なものが名古屋友禅、名古屋黒紋付、尾張七宝、つげ櫛、和菓子です。

尾張藩に木曾の山が与えられたことで、堀川一帯は木材の製造・加工・流通の一大拠点となります。名古屋城下へ移住してきた商工業者の技術も応用され、名古屋桐箆笥などの木製家具、木桶、欄間などの生産が盛んになります。

三河地方では、主に繊維産業と食品産業が発展しました。農家が棉の栽培で綿花を採り、糸を紡いで機織りをして、自家消費後の余剰分を換金しました。東三河で盛んになった養蚕は、桑の木を栽培し、蚕を育てて、繭にして換金しました。いずれも農家の副業の域を出ない産業でしたが、綿織物については「三河木綿」として広く知られる特産品となりました。華美を戒めるために幕府が農民や町人に対して絹織物の着用を禁じ、綿織物を奨励する政策を採ったことも、木綿需要の拡大につながったと考えられます。18世紀に入ると尾張でも綿織物が盛んになります。

江戸時代は世の中が安定したこともあり水運が発達しました。当地は大坂と江戸の中継地として利点があったほか、東海道など陸路との相乗効果により原料や製品の移送方法が改善され、知多地域や衣

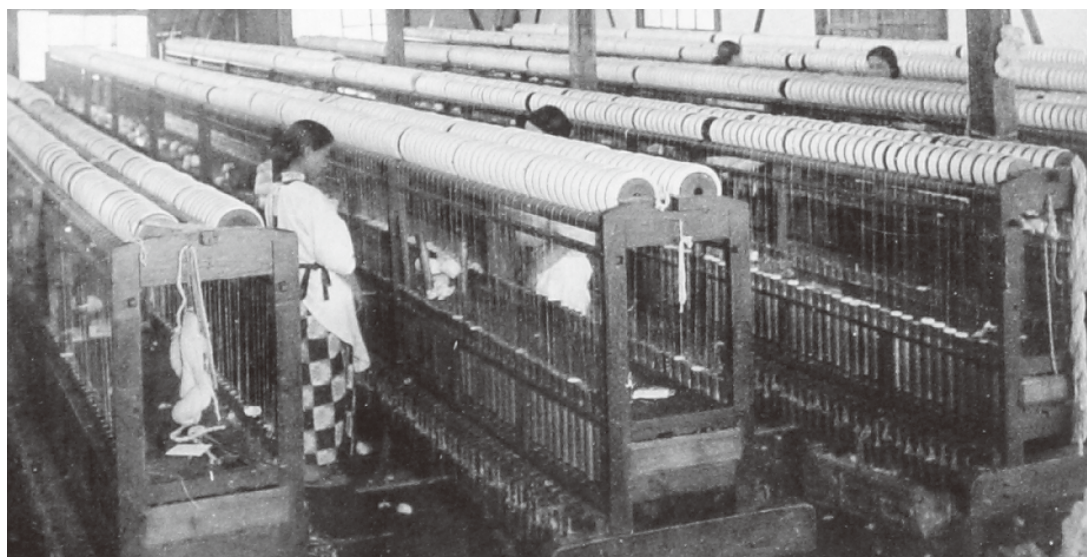
浦地域で醸造関連の食品産業が発展しました。「下り酒」といわれた清酒のほか、酢、みりん、味噌、しょうゆ等です。さらに三州瓦、岡崎の八丁味噌や石製品も、水運に恵まれたことが発展の追い風になったとみられます。

Ⅲ. 明治時代(1868～1912年)

1867年(慶応3年)に徳川慶喜が政権を返上したことにともない、明治天皇を中心とした新政府が樹立されました。欧米諸国では産業革命が進行しており、明治時代になると、わが国へ最新の機械設備や技術が次々と導入されるようになります。

1871年の廃藩置県を経て、翌1872年に当地域は愛知県となりました。東京や大阪にくらべやや遅れましたが、1889年に東海道線が全通、1889年には名古屋電燈が送電開始、1906年に名古屋瓦斯(現東邦ガス)設立、1907年には名古屋港開港と、社会インフラ整備面で二大都市圏との格差が縮小し、当地域の産業近代化の基盤が整います。

この時代も主要産業といえば繊維で、1877年には三河でガラ紡がはじまったようです。1880年に官営の愛知紡績所が岡崎市に設立されました。この工



ガラ紡工場(岡崎市立中央図書館蔵)



オークマ(株)本社 メモリアル・ギャラリー

場にはイギリスから輸入された2,000錘のミュール精紡機が設備されました。また岡谷惣助らによる(民営)愛知紡績所、瀧定右衛門らによる尾張紡績所といった民間紡績所が設立されたのもほぼ同時期です。

以降、大正から昭和にかけて、愛知県内の繊維産業分布が次第に固まっていくこととなり、一宮を中心とした尾西地方は日本一の毛織物産地へと発展しました。半田市・西尾市・蒲郡市とその周辺では綿・スフ織物の産地が形成され、岡崎市や安城市の周辺では綿紡績と羊毛紡績が盛んとなり、豊橋市を中心とした東三河では生糸生産が大きく増加しました。

1890年代になると各種機械産業が興ります。1893年に愛知時計電機製造、1898年に大隈榮一による大隈麵機商会(現オークマ)、そして1908年には安井ミシン商会(後の安井ミシン兄弟商会)が設立されます。さらに豊田佐吉が、1894年に糸繰返機、1896年には木製動力織機を実用化しました。佐吉が実用化した織機はわが国繊維機械産業の源流といえます。性能面で輸入精紡機に劣った和紡機ですが、廉価だったことから西三河で広く導入され、長い間使用されました。

その他の産業では、1887年から鈴木政吉がバイオリンの製作を開始。第一次世界大戦で欧州の弦楽器製造所が壊滅的な打撃を受けたこともあり、同時期の鈴木バイオリンの従業員数は1,000人を超え

ていました。また1903年には日本陶器(現ノリタケ)が設立され、白色磁器を初めて国産化しています。

IV. 大正時代(1912~1926年)

1914年7月に勃発した第一次大戦はわが国の輸出が急増するきっかけとなり、空前の好景気に沸きました。

木製動力織機を実用化した豊田佐吉は、その後幾度の起業を経て、1918年に豊田紡織を設立します。これが1926年に設立される豊田自動織機製作所の前身です。当地域では機械関連産業が一段と盛んになり、1919年に山崎鉄工所(現ヤマザキマザック)が設立されたほか、1920年には三菱内燃機製造が名古屋工場(後の三菱重工業名古屋航空機製作所)を設置、また愛知時計電機が航空機の製造を開始しました。

航空機生産が名古屋に集中したのは偶然ではありません。名古屋城築城以来、名古屋は木材の集散地であり、製材技術も発達していたことと大いに関連しています。ジュラルミンが使用されるようになる前、飛行機は基本的に木製でした。したがって木材の加工・合板技術は、初期の飛行機性能に大きな影響を与えていたのです。

その他の産業では、1903年にトマトソースの製造を開始した蟹江一郎が、1914年に愛知トマトソース(現カゴメ)を設立しました。また1921年に伊那製陶(現LIXIL)が設立され、当初は水道管や半磁器タイルを手掛けました。

V. 昭和~太平洋戦争まで(1926~1945年)

豊田自動織機製作所内に自動車部が設置されたのは1933年。きっかけは1927年に勳三等瑞宝章を授かった豊田佐吉が長男の喜一郎に対して「自動車をつくれ。自動車をつくってお国のためにつくせ」と語ったことだといわれます。



トヨタ・AA型乗用車

自動車部は1936年に初の乗用車「トヨタAA」の生産を開始し、1937年にはトヨタ自動車工業として独立することになります。翌1938年に挙母町（現在の豊田市）に最初の工場が完成しました。そのころにはすでに、喜一郎から「ジャスト・イン・タイム（JIT）」の生産方式が示されていたようです。JITは、佐吉がこだわった「自動化（機械を管理・監督する作業者の動きを、単なる動きではなく働きにする）」という考え方と結びつき、今日に続くトヨタ生産方式が生まれました。

トヨタ自工設立以降、同社の各部門は1940年に豊田製鋼（現愛知製鋼）、1941年には豊田工機（現ジェイテクト）、そして1945年にトヨタ車体工業（現トヨタ車体）として独立しました。1943年にはトヨタ自工と川崎重工業が合弁方式で東海航空機工業（現アイシン精機）を設立しています。

その他の産業では、1932年に安井ミシン兄弟商会（現ブラザー）がミシンの国産化に成功。また1935年に名岐鉄道と愛知電気鉄道が合併し、名古屋鉄道が設立されました。1939年からは、三菱重工業名古屋航空機製作所で零式艦上戦闘機（通称ゼロ戦）が設計・製作されました。

VI. 戦後復興期（1945～1954年）

全国有数の工業地帯を形成していた愛知県は、太平洋戦争後期の1944年末から度重なる空襲を受け、主要地区は大きな被害をこうむりました。

1947年に連合国軍総司令部（GHQ）が綿紡績と毛紡績の復元目標を示したように、当地域に限らず、わが国の戦後復興にあたって原動力となったのは繊維産業でした。

終戦直後、わが国経済が抱えていた大きな課題は①生活必需品である衣料の確保、②供給過剰状態の労働力の活用、③外貨獲得に向けた輸出産業の育成などでした。集約的な労働力を要する繊維産業はその大きな受け皿になると有望視されたのです。実際、繊維産業は急速に成長を遂げ、ガチャンと織れば万円が儲かる、いわゆる「ガチャ万景気」という言葉を生み出したほどでした。

当地域ではほかに、陶磁器やミシン産業なども復興を支えました。陶磁器は原料を国内調達できることや、もともと国際競争力を有していたことから食器関連、タイル、置物の生産が活発になりました。ミシン生産も1950年には全国シェアが30%に達し、うち4割は輸出に向けられました。

終戦直後は復興用トラック生産が中心だった自動車産業は順風とはいえませんでした。トヨタ自工は生産能力を徐々に拡大していったのですが、販売は思うように伸びませんでした。1950年には経営問題と関連して、トヨタ自動車販売がトヨタ自工から独立しました。なお1949年にはトヨタ自工の刈谷北工場が日本電装（現デンソー）として独立しています。

その他の産業では、1951年に全国で9電力会社が誕生。当地域では中部電力が発足しています。また1952年には木曾川町に、日本コンタクトレンズ研究所（現メニコン）が設立されました。

VII. 高度経済成長期（1955～1972年）

わが国経済は1955年に本格的な景気回復を迎えました。この年から1957年までを「神武景気」、1959～61年が「岩戸景気」、1965～70年の間は「いざなぎ景気」と名付けられた好景気が続きます。

1960年、池田隼人内閣は所得倍増政策を打ち出しました。向こう10年間で国民所得を倍増するというものです。このころから大衆レベルでも、「3C」とよばれたカラーテレビ、クーラー、乗用車を購入しようとする動きが目立つようになりました。

トヨタは1955年にトヨペット・クラウン「RS」型を発売。これは当時の値段で101.5万円と高級車でした。1960年代に入ると高速道路の建設が進み、1964年に名神高速道路、1969年には東名高速道路がそれぞれ全線開通しました。

道路整備とともに乗用車に対する関心が一段と高まっていた1966年、トヨタは排気量1,000CCのカロラを40万円台で発売しました。カロラはすぐに人気車となり、後に世界各国で販売され、現在までの生産累計台数は世界一となっています。

その他の産業では、1962年に初の国産民間旅客機「YS11」が名古屋空港（現愛知県空港）で試験飛行を開始。双発ターボプロップ機で、試作機を含め182機が製造されました。

VIII. 石油ショック以降（1973年～）

1973年10月の第四次中東戦争を機に生じた石油ショックは世界経済に深刻な影響を与え、わが国経済は翌1974年にマイナス成長となり、インフレ率は23%に達しました。

石油ショックを境に、戦後復興を支えた繊維産業は大きな曲がり角を迎えました。一方、省エネルギー意識の高まりとともに産業界が合理化投資を積極化したことで、1977年ごろより工作機械の需要が急拡大しました。またエネルギー消費量の大きい鉄鋼産業などに陰りがみられはじめる一方、エレクトロニクス産業が台頭していきます。

このような環境においても自動車産業は着実に発展を続け、1980年には国内生産台数が1,100万台に達し、米国を抜いて世界1位となりました。その2

年後、トヨタ自工とトヨタ自販が合併。現在のトヨタ自動車が生産しています。

1985年、先進主要国はドル高是正に向けて、いわゆるプラザ合意に至りました。これを機に、1ドル250円前後で推移していた為替相場が、翌年には150円まで急激に円高・ドル安に進みました。円高進行は愛知県の自動車や機械産業に経営戦略の見直しを迫ることとなり、高付加価値化に加えて生産拠点の海外移転が本格化しました。トヨタ自動車は米国でレクサスの展開をはじめたのは1989年（日本では2005年）です。

またトヨタ自動車が1997年に発売したプリウスは、世界的に関心が強まっている環境問題への先駆的な取組みとみなされ、同社のブランド価値を高める原動力となりました。2014年には、走行時に二酸化炭素を排出しない燃料電池車ミライの発売を開始しました。

その他の産業では、2008年に三菱重工業が国産初の小型ジェット旅客機「MRJ」を生産するために、三菱航空機株を名古屋に設立しました。

IX. 愛知県の農業と水産業

愛知県では施設園芸が盛んです。キク・バラ・カーネーションなどの花卉、洋ラン・観葉植物・サボテンなどの鉢物、あるいは温室みかんやいちごなどが栽培されています。戦後の農地改革により自立農家が増えたことや、東京や大阪など巨大消費地に近く交通網にも恵まれていることから、高い付加価値を生み出す施設園芸生産に転換していったと考えられます。

水産業も同様に、うなぎ養殖はハウス加温式を採用して一大産地を形成しています。近海で水揚げされた魚介類を使用した食品加工の分野でもそのブランドが知られた商品は多く、県内のいくつもの沿岸部では、ちくわ・かまぼこなどの練り製品、えびせんべい、佃煮などの産業集積がみられます。